

## 極東における帝立ロシア地理学協会：サハリン地理調査を手がかりとして

天野尚樹（北海道大学大学院文学研究科）

### はじめに：帝国と地理学

19世紀後半にはじまるヨーロッパ列強の植民地獲得競争において、地理学は重要な役割を果たした。地理調査によって植民地の開発可能性をさぐり、政府に提言し、世論を喚起する。地理学は、いわば帝国の水先案内人であった。本稿は、帝政期ロシアにおける帝国と地理学の関係を、極東での帝立地理学協会の活動を通して検証しようとするものである。

帝国と地理学という問題は、地理学史における近年流行のテーマである<sup>1</sup>。もっとも、地理学史の伝統において、このテーマはそれほど古いものではない。先駆的な研究としては、フランスの地理学協会について1943年に書かれたマッケイの論文がある<sup>2</sup>。しかし、近年の隆盛は、1977年のハドソンの画期的な論文によって開始され<sup>3</sup>、その翌年のサイド『オリエンタリズム』の出版がこの流れを決定づけた<sup>4</sup>。この問題設定の文脈のなかでは、地理学協会の果たした役割がひとつの重要なトピックとされているが、帝立ロシア地理学協会については、管見の限り、バシンによるものがあるだけである<sup>5</sup>。

ロシアでは、地理学協会自身が複数の協会史を編纂している。『25年史』<sup>6</sup>、『50年史』<sup>7</sup>、『100年史』<sup>8</sup>、『125年史』<sup>9</sup>とあるが、このうち質量ともに圧倒的なのは、著名な地理学者セミョーノフ＝タヤン＝シャンスキー（П. П. Семенов-Тянь-Шанский）が編纂した『50年史』全3巻である。1000ページをはるかに超えるこの大著が、帝政期の地理学協会研究のための基本資料である。また、創立150周年を記念して2冊の論集がイルクーツクとウラジオストクで刊行された<sup>10</sup>。研究書としてはオグレズネワによるものがあるが、記述の中心は地

<sup>1</sup> 代表的な業績としては、Felix Driver, “Geography’s Empire: Histories of Geographical Knowledge,” *Environment and Planning D: Society and Space*, No. 10, 1992, pp. 23-40; David N. Livingstone, *The Geographical Tradition*, 1992; Anne Godlewska and Neil Smith eds., *Geography and Empire*, Oxford, 1994.

<sup>2</sup> Donald Vernon McKay, “Colonialism in the French Geographical Movement 1871-1881,” *Geographical Review*, No. 33, 1943, pp. 214-232.

<sup>3</sup> Brian Hudson, “The new Geography and the New Imperialism: 1870-1918,” *Antipode*, No. 9, 1977, pp. 12-19.

<sup>4</sup> Edward W. Said, *Orientalism*, London, 1978.

<sup>5</sup> Mark Bassin, “The Russian Geographical Society, the “Amur Epoch” and the Great Siberian Expedition 1855-1863,” *Annals of the Association American Geographers*, vol. 73 (2), 1983, pp. 240-256.

<sup>6</sup> Двадцатипятилетие Императорского русского географического общества 13 января 1871 года. СПб. 1872.

<sup>7</sup> Семенов П. П. История полувековой деятельности Императорского русского географического общества 1845-1895. Ч. 1-3. СПб. 1896. 全3巻のうち、1845年から1871年までを扱った第1巻のみが北海道大学附属図書館に所蔵されている。第2巻・第3巻については、残念ながら現時点では未見である。

<sup>8</sup> Берг. Л. С. Всесоюзное географическое общество за сто лет. М. 1946.

<sup>9</sup> Калесник С. В. (отв. ред.). Географическое общество за 125 лет. Ленинград. 1970.

<sup>10</sup> Снытко В. А. (отв. ред.). Географические исследования Азиатской России: история и

理学協会西シベリア支部（オムスク）周辺の活動におかれている<sup>11</sup>。帝政期における極東の地理調査の全体像を得るには、アレクセーエフの1970年代の研究が今日でも最良の手引きである<sup>12</sup>。

以下、まず第1節ではロシア帝立地理学協会の設立経緯と機構的特徴から、帝国政策との関係性を検証する。第2節では、極東における地理学協会の活動の実際を、サハリン地理調査の報告を手がかりとして分析する。

## 1 帝立ロシア地理学協会：機構と思想の帝国性

帝立ロシア地理学協会は1845年8月6日<sup>13</sup>に設立された。ロシアの地理研究、辺境研究が活発化した1820年代から創設の機運はあったが、直接の契機となったのは、ミッドENDORF (А. Ф. Миддендорф) のタイムイル半島とプリアムール地方の探検がおこなわれた1840年代初頭のことでとされる<sup>14</sup>。また、バシンによると、ニコライ1世の抑圧政治に反対する改革派ナショナリストの声の高まりが設立を後押しした。彼らは、ツァーリ政府の外交が西欧に追従的でありすぎると非難していた。ナポレオン戦争以後のいわゆるウィーン体制 (the concert of Europe) によってその反動政治が擁護されており、それゆえに政府は西欧に追従するのだというのがナショナリストたちの見解だった。この状態を脱するためには、アジアに積極的に進出し、西欧との均衡をはかるべきだと彼らは主張する。アジアとヨーロッパにまたがって位置するロシアには、未開のアジアの蒙を啓く「文明の使者」としてのメシアニズム的使命があるというのが彼らを支える信念だった。また、アヘン戦争に端を発する西欧諸国のアジア進出が、その思いをいっそう強くした<sup>15</sup>。そのためには、いまだ未知の辺境が多数存在する祖国「ロシア」を知ることが必要であると考えられた。こうした声を背景に設立された協会の当初の名称は「ロシア地理学協会」(Русское географическое общество) であった。名称に「帝立」(Императорское) が付されるのは1849年のことである。初代の議長には、ニコライ1世の次男で、改革派の代表的人物であった大公コンスタンチン・ニコラーエヴィチ (Константин Николаевич) が就任した。

設立された協会は、ふたつの意味でドイツ的色彩が濃厚であった。第1に、地理学的系譜としてドイツ地理学の圧倒的影響下にあった。ある意味これは当然のことといえる。近代科学としての地理学はまだ創成期にあった。その母体となったのが、ベルリン大学を拠点とするドイツであった。地理学の父と称されるフンボルト (Alexander von Humboldt)、学

---

современность. Иркутск. 1995; Бакланов П. Я. (отв. ред.). Географические исследования на Дальнем Востоке. Владивосток. 1997.

<sup>11</sup> Оглезнева, Т. Н. Русское географическое общество: изучение народов северо-востока Азии 1845-1917 гг. Новосибирск. 1994.

<sup>12</sup> Алексеев А. И. Русские географические исследования на Дальнем Востоке и в Северной Америке (XIX-начало XX в.). М. 1976.

<sup>13</sup> 本稿での日付は旧暦を用いる。

<sup>14</sup> Энциклопедический словарь. Т. 8. СПб. 1892. С. 369.

<sup>15</sup> Bassin, "The Russian Geographical Society..." pp. 241-243.

問としての地理学の土台を築いたカール・リッター (Carl Ritter) が、名誉会員としてロシア地理学協会に名を連ねていた。また、長く協会の指導的地位にあったセミョーノフ＝タヤン＝シャンスキーはベルリン留学の経験があり、ベルリン地理学協会の初代議長でもあるリッターの大著『地理学』全 18 巻のうちの『アジア地理学』のロシア語訳に従事していた。この翻訳は協会の事業であった。また、帝政期における協会の業績の多くがドイツ語で発表されている。ドイツ地理学、とりわけ人文地理学の性格としては、次の指摘が興味深い。「ドイツの『アントロポゲオグラフィー』は歴史と文化を地理的条件から説明する。すなわち人間を自然の観点から説明する傾向がある。これに反してフランスの『ジェオグラフィー・ユメヌ』は、土地の構成のうちに人間の意識的能動作用を認めようと努める。……自然と運命との力にたいして、自由な人間の能動性を強調するのである」<sup>16</sup>。

ドイツ的性格の第 2 の側面として、設立当初の指導者をバルト系ドイツ人が占めていたことがあげられる。協会の学術面での基盤を築いたストルーヴェ (В. Я. Струве)、カール・ベール (К. М. Бэр)、ゲリメルセン (Г. П. Гельмерсен)、そして初代副議長の任にあたりトケ (Ф. П. Литке) ら、創設の主導権を握っていたのはバルト系ドイツ人であった。もっとも、これも不思議なことではない。ニコライ 1 世治世下の政府の要職にはバルト系ドイツ人が数多く名を連ねていたからである。セミョーノフが書いているように、「ドイツ人教師たちが、草創期において、協会の精神に外国製の衣装をかせとしてまとわせていた」<sup>17</sup>。こうした傾向に若きロシア人ナショナリストたちが異を唱え、やがて主導権を握るようになっていく。その代表が、セミョーノフであり、東洋学者のグリゴリエフ (В. В. Григорьев) であり、東シベリア総督ムラヴィヨフ＝アムールスキー (Н. Н. Муравьев-Амурский) であり、サハリン「島」発見のネヴェリスコイ (Г. И. Невельской) である。協会の初期における最大の事業である大シベリア遠征を主唱したのが彼らであった。地理学協会はその内部においても、ロシアの極東進出とパラレルな関係にあった。

そもそも、地理学協会という存在の形成と発展は、ロシアを含むヨーロッパ諸国の植民地獲得競争と軌を一にしている。この種の機構の起源は、1688 年にヴェネツィアに設立された天文地誌協会にあるといわれているが、本格的には、1821 年創設のパリ地理学協会をその嚆矢とする。1828 年にはベルリンに、1831 年にはロンドンに王立地理学協会が設立された。その後、ボンベイ (1831 年)、リオデジャネイロ (1838 年)、メキシコ (1839 年) に開設され、ロシア地理学協会は世界で 7 番目、ヨーロッパで 3 番目の創設である。

地理学協会の拡大的発展の契機になったのは 1870 - 1871 年の普仏戦争 (独仏戦争) である。スペイン王位継承問題を直接の契機として起こったこの戦争は、プロイセンを主とするドイツ諸邦側の大勝に終わった。ドイツは統一を達成し、フランスはアルザス・ロレー

<sup>16</sup> エルンスト・クルティウス『フランス文化論』大野俊一訳、創元選書、1942 年、56 - 58 ページ。ドイツ地理学の思想についてより詳しくは以下を参照。野間三郎『近代地理学の潮流——形態学から生態学へ——』大明堂、1963 年；水津一郎『近代地理学の開拓者たち』地人書房、1974 年。

<sup>17</sup> Семенов. История полувекковой деятельности... Ч. 1. С. XXVI.

ヌ地方の大部分を失い、第三共和制が発足した。その結果、フランスにおいて地理学に対する要請が急速に高まった。というのも、敗北の原因がドイツの地理認識の優位性にあると考えられたことと、商業的目的に加えてアルザス・ロレーヌからの移民の受け入れ先としてもアフリカにおける植民地建設を強化する必要が生まれたことにある<sup>18</sup>。1892年の時点でフランスには31の各種地理学協会が設立され、総会員数は18万6500人を超えた。これを追いかけるように、ヨーロッパを中心に各国で地理学協会の活動が活発化する。同じく1892年の数字では、全世界での地理学協会の総数は117団体を数え、協会員の数は約53万人にのぼった。イギリスが23団体7600人、ドイツが23団体7600人という規模をほこった当時、ロシア地理学協会の会員数は1500人であった<sup>19</sup>。

フランス、あるいはドイツ・イギリスの地理学協会とロシア地理学協会の大きな違いは、その組織的統一性にある。地方や植民地の各組織が独自に存在・活動する西欧諸国の協会に対して<sup>20</sup>、ロシア地理学協会は中央に機能が集中し、各地の組織はあくまで中央の支部として存在した。1850年にカフカス支部が置かれたのを皮切りに、イルクーツクにおかれたシベリア支部（1851年。1877年以降は東シベリア支部）、北西支部（1851年、ヴィリニユス）、オレンブルク支部（1868年）、南西支部（1873年、キエフ）、西シベリア支部（1877年、オムスク）とつぎつぎに支部が設立された<sup>21</sup>。その設置場所からみても明らかだが、各支部は総督府と、言い換えれば、帝国の植民地建設活動と密接な関係にある。

1853年に実行される大シベリア遠征の計画が練られはじめたのは1850年であるが、シベリア支部の開設はこれと並行しておこなわれた<sup>22</sup>。1850年、東シベリア総督府内に、シベリアの自然に関するコレクションを展示した博物館が設置された。これがシベリア支部の前身となり、翌1851年6月6日、支部の創設が承認された。総督ムラヴィヨフ＝アムールスキーの招集によって開かれた第1回の会合で支部議長に選出されたのは、カルル・ヴェンツェリ（К. К. Венцель）であった。約40人の入会希望者があった。その数は25年間で270人を超えるまでになった。

支部の活動は、本部の遠征の準備、小遠征の実施、学術研究が主たるものとされた。また、現地の知の集積所としての機能を果たしていた。これは、後述するプリアムール支部においても同様である<sup>23</sup>。しかし何より特徴的なのは、あらゆる事業が東シベリア総督府の

<sup>18</sup> McKay, "Colonialism in the French Geographical Movement," p. 219.

<sup>19</sup> Энциклопедический словарь. Т. 8. С. 369.

<sup>20</sup> たとえばフランスの場合、1876年にパリ地理学協会から商業地理協会が分離独立したほか、リヨン（1873年）・ボルドー（1874年）・マルセイユ（1876年）・オラン（アルジェリア、1878年）・モンペリエ（1878年）・ロシュフォール（1878年）・ナンシー（1879年）・ルアン（1879年）・ドゥアイ（1880年）などの地方地理学協会が創設された。McKay, "Colonialism in the French Geographical Movement," pp. 226-229; T. W. Freeman, *A Hundred Years of Geography*, London, 1971, pp. 51-52.

<sup>21</sup> 北西支部、南西支部は後に廃止。

<sup>22</sup> 以下の記述は、次の文献による。Очерк двадцатипятилетней деятельности Сибирского отдела Императорского русского географического общества. Иркутск. 1876. С. 1-6.

<sup>23</sup> Дубинина. Н. И. Приамурский генерал-губернатор Н. И. Гродеков. Хабаровск. 2001. С. 135.

支援によってなされていたことである。財政的援助もさることながら、全会員が何らかのかたちで総督府の業務に携わっており、総督の許可なくしては地理学的活動に従事することが許されなかったのである。「支部は、狭い専門家集団に閉じこもることは決してなく、学術調査の成果を社会認識につなげ、常に実践への適用を目指していた」<sup>24</sup>。

1884年に総督府が設置されたプリアムール管内には、1894年に地理学協会プリアムール支部が開設された。その10年前、すなわちプリアムール総督府の創設と時を同じくする1884年、ウラジオストクにアムール地方研究協会（Общество изучения Амурского края）が創立されている。ロシアのサハリン進出の実行部隊を率いたニコライ・ブッセ（Н. Б. Буссе）の従兄弟である Ф. Ф. ブッセが初代会長をつとめたこの協会が、プリアムール支部の前身的作用を果たした。ちなみに、同協会の付属博物館には1903年、著名な東洋学者であり、東京地学協会が1908年に刊行した『樺太地誌』の編纂にも携わった白鳥庫吉が見学を訪れている<sup>25</sup>。

プリアムール支部の創設は、二等文官ワシーリー・ラダコフ（В. Н. Радаков）によるプリアムール総督ドゥホフスコイ（С. М. Духовской）への上申を直接の契機とする。そのなかでラダコフは、きわめて独特な極東の地理を研究するには、「プリアムール地方に既存の学術集団や博物館を、内的なつながりをもって、ひとつに結集する」ことが必要であると訴えた<sup>26</sup>。自らも地理学協会正会員であり、政府における協会の影響力の大きさを知悉していたドゥホフスコイは、この上申を認め、当時協会副議長の任にあったセミョーノフに支部開設を訴えた。1894年5月に皇帝の裁可を受けたプリアムール支部の初代議長には、ドゥホフスコイの後継総督となるグロデコフ（Н. И. Гродеков）総督補佐が選出された<sup>27</sup>。1899年時点で260人の会員数を数え、「行政府とインテリゲンツィアの連結還」<sup>28</sup>の機能を果たした同支部の活動としては、プロニスラフ・ピウスツキ（Б. Пилсудский）の処女論文である「サハリン・ギリヤークの困窮と要求」の出版と、1906年から1907年にかけておこなわれたアルセニエフ（В. К. Арсеньев）の沿海州調査が特筆される。アルセニエフの1907年の調査記録が、黒澤明の映画でも有名な『デルスウ・ウザーラ』である。

以上みてきたように、ロシア地理学協会は帝国政策と密接な関係をもつ存在であった。その関与の直接性という点では、他国の地理学協会に比しても断然大きいといってよい。とりわけ支部は、現地総督府のいわば「片腕」<sup>29</sup>であった。

では、地理学協会は極東をどのように認識していたか。次節では、帝政期のサハリンに焦点をあてて、そこで描かれた地理像を検証する。

<sup>24</sup> Очерк двадцатипятилетней деятельности Сибирского отдела... С. 5.

<sup>25</sup> 原暉之『ウラジオストク物語 ロシアとアジアが交わる街』三省堂、1998年、215 - 217ページ。

<sup>26</sup> Возникновение Приамурского отдела Императорского русского географического общества // Приамурские Ведомости. 8/5/1894. Приложение к № 19.

<sup>27</sup> Дубиниа. Приамурский генерал-губернатор... С. 106-110.

<sup>28</sup> Там же. С. 137.

<sup>29</sup> Bassin, "The Russian geographical society..." p. 249.

## 2 サハリン地理調査

### 2.1 ボシニャーク・ルダノフスキー・シュレンク

サハリンの地理調査は、ネヴェリスコイ指揮下のアムール遠征に付随しておこなわれたボシニャーク (Н. К. Бошняк) によるものが最初である<sup>30</sup>。ボシニャークは1851年にアムール遠征に参加し、1852年2月に、ネヴェリスコイからサハリンの調査を命じられた。その目的は、「ギリヤークからの情報によると、サハリンにかなり広大な石炭の鉱脈があり、それを調査すること、および、島を横断してオホーツク海に出るとすばらしい湾があるといわれているので調査すること」にあった<sup>31</sup>。その結果ボシニャークは、北緯49度付近にインペラートル湾を「発見」した。この「発見」が、ネヴェリスコイをサハリン占領へとむかわせるひとつの契機となったことは、占領政策を指揮したブッセも指摘するところである。「おそらくは、タタール海峡アジア沿岸の北緯48~49度においてL・ボシニャーク大尉が発見したすばらしい湾のことが、それより北方の全地域をロシアに帰属する土地として占領したいというネヴェリスコイの熱意の原因となったのであろう」<sup>32</sup>。さらに、この調査でボシニャークが明らかにしたのは、サハリン北部には日本の支配が及んでいないということである。すなわち、先住民のギリヤークと日本人との関係は存在せず、「サハリンの半分の住民は、自らを支配するいかなる政府の存在も知らない」のであった<sup>33</sup>。

ブッセの副官をつとめたルダノフスキー (Н. В. Рудановский) は、サハリン南部をくまなく調査し、「南サハリンの内陸地域を学問のために文字通り発見した」<sup>34</sup>。調査の結果ルダノフスキーは、サハリンの完全占領の権利が間違いなくロシアに属すると主張する。ルダノフスキーによれば、クルーゼンシュテルンらの功績によって、「発見の権利と時間から、現在のシベリア南東岸同様、サハリン島がロシアに帰属するものであることがわかる。日本政府がサハリンに対する権利を主張することはいかなる点においてもできない。なぜなら、サハリンを訪れていたのはマツマイの漁民のみで、それも夏のわずか1ヶ月のあいだだけであって、また彼らには日本政府からの権威も保護も与えられていなかった。日本の地図ではサハリンはカラフト、つまり中国の島と常に呼ばれている」<sup>35</sup>

1854年から足かけ3年にわたってサハリン調査にあたったのは動物学者のシュレンク (Л. И. Шренк) である。大著『アムール地方の異族人について』で知られるシュレンクの調査

<sup>30</sup> ネヴェリスコイのアムール遠征について詳しくは以下を参照。Алексеев. А. И. Амурская экспедиция 1849-1855 гг. М. 1974.

<sup>31</sup> Бошняк. Экспедиции в При-Амурском крае: Экспедиция на Сахалин с 20 февраля по 3 апреля 1852 года // Морской Сборник. 1858. № 12. Неоф. 182.

<sup>32</sup> Буссе. Н. Б. Остров Сахалин и экспедиция 1853-54 гг.: Дневник 25 августа 1853г.-19 мая 1854г. СПб. 1872. С. 6 [邦訳: 『サハリン島占領日記』秋月俊幸訳、平凡社、東洋文庫、54 - 55 ページ。]

<sup>33</sup> Бошняк. Экспедиции в При-Амурском крае. Неоф. 190-191.

<sup>34</sup> Алексеев. Русские географические исследования... С. 35.

<sup>35</sup> Невельской Г. И. и Рудановский Н. В. По поводу воспоминаний Н. В. Буссе об острова Сахалина и экспедиции 1853 года: Письмо к редактору // Вестник Европы. 1872. № 8. С. 912-913.

記録の多くはドイツ語で発表されているが、科学アカデミーに宛てた報告のなかで、サハリンの気候が北部と南部で大きく異なり、北部のそれは大陸の気候と似通っていると指摘している。しかし、「南では逆に、大陸から離れているせいで、大陸からの冷たい北風の影響がますます排除されるにちがいない」<sup>36</sup>。地理的決定論風にいえば、「ロシア」の境界はサハリンの北部で画されるとシュレンクは考えていた。

## 2.2 大シベリア遠征

地理学協会によるサハリン調査は、大シベリア遠征の一環としておこなわれた。1855年から1863年までの8年がかりでおこなわれたこの遠征は、当初の構想では「カムチャツカ＝アメリカ遠征」と名づけられていて、副議長リトケはカムチャツカを調査の中心に考えていた。それが、1853年ごろまでには、東シベリアと極東を調査対象が変更された。その理由は第1に、カムチャツカ遠征の危険をいとわない人物が確保できなかったこと、第2に、クリミア戦争の余波が極東に及ぶことが予想されたこと、そして第3に、ムラヴィヨフの積極的な宣伝工作が功を奏したことにある<sup>37</sup>。

サハリン調査を指揮したのはФ. シュミット (Ф. Б. Шмидт) である。1859年4月にペテルブルクを發ったシュミットは、アムール流域、ウスリー地方など東シベリア全域の調査にあたるなかで、サハリンを繰り返し訪れ、最も多くの調査時間を割いた。調査終了後シュミットは、3冊の報告書を編集している。第1冊は、調査の行程記録が中心で、第2冊と第3冊は、植物相や化石などサハリンの生態系に関するきわめて詳細な調査報告である<sup>38</sup>。リン見聞は、石炭開発が進むドゥエ周辺で主におこなわれた。シュミットによれば、ギリヤークと少数のアイヌが生活するドゥエ周辺には「日本人の影響力は及んでいない」。日本人は、デスタン湾 (ウショロ) を「自らの国境」と考えていると述べている<sup>39</sup>。サハリンにとどまって調査にあたった助手のグレンも、ロシアと日本の国境は北緯48度付近であると証言している<sup>40</sup>。シュミットは、ロシアの境界が地理学的にもサハリン島上で画定されるという認識を示した。すなわちシュミットは、南サハリンの植生が大陸のものとは異なっており、日本に固有の植生的特徴がみられると述べているのである。「サハリンはふたつの植生域にわけることができる。一方は、オホーツク海沿岸およびカムチャツカの植物相とよく似ているところがある。しかし他方は、北日本の植生の延長上にある」<sup>41</sup>。

<sup>36</sup> 以下より再引用。Алексеев. Русские географические исследования... С. 42-43.

<sup>37</sup> Семенов. История полувекковой деятельности... Ч. 1. С. 73-76.

<sup>38</sup> Шмидт Ф. Б. «Ботаническая часть». Труды сибирской экспедиции Императорского русского географического общества. Физический отдел. Т. 2. СПб. 1874; «Окаменелости меловой формации с острова Сахалина». Труды сибирской экспедиции Императорского русского географического общества. Физический отдел. Т. 3. вып. 1. СПб. 1873.

<sup>39</sup> Шмидт Ф. Б. и Глен П. П. Труды сибирской экспедиции Императорского русского географического общества. Физический отдел. Т. 1. исторические отчеты. СПб. 1868. С. 24.

<sup>40</sup> Там же. С. 106.

<sup>41</sup> Там же. С. 68.

さて、シュミット自身は、東シベリア全域を調査対象としていたため、サハリンに常時滞在していたわけではない。サハリン調査に専従してシュミットに情報を提供したのは、さきに述べた助手のグレンと A・ブリルキンである。このブリルキンがサハリン滞在中に書き送った書簡が地理学協会シベリア支部の紀要に掲載されており、興味深い内容を含んでいる。

ブリルキンもこの調査で、北緯 48 度以南に関する日本の支配権の確立を認めることになった。しかも「日本人は、クシュンナイの国境を認めることなど考えておらず、ウスリーおよびタライカ湖までの全域を自分たちの領土だと考えている」<sup>42</sup>。南サハリンにおける日本の支配は、アイヌに及ぼしている影響力の大きさにもみることができる。アイヌの生活習慣には、すでに日本式の習慣が相当浸透しており、生活用品については日本製品がほぼ完全にとってかわってしまっている。しかしこの支配は、強制的手段によってもたらされたのではない。「アイヌは、自発的に同意して日本人のために働いているのである」。アイヌが日本人から罰を受けるとすれば、ロシア人との関係をめぐっての過失をおかした場合などに限られている。日本人は、アイヌの生活の物質的向上に配慮しており、餓死者が出ることはもうない。教育や医療面での援助もおこなっている。「日本のサハリン支配の成果は明白である」<sup>43</sup>。ブリルキンは、「ロシア人がサハリン占領という希望をいだきつづけることをわたしは不誠実なことだと思う」とまで述べている<sup>44</sup>。

「ロシア」の地理を明らかにすることを目的としておこなわれた大シベリア遠征は、「ロシア」の境界がサハリンの北半分まで至ることを地理学的に描き出した。それは少なくとも、共同領有状態にあった当時のサハリンにおけるロシアの地位を正当化したものといえる。しかし、地理学協会の極東への関心はこれ以後急速に薄れていく。イギリスとのいわゆるグレート・ゲームの進展にあわせて、中央アジアの調査が事業の中心になっていくのである。

### 2.3 ポリャコフ・ニコリスキー・日露戦争後

地理学協会の主導によるサハリン調査は、その後約 20 年の空白の後、サハリン全域がロシア領となっていた 1880 年に再開された。調査計画は、Ф. ブッセ、シュミットらで構成された委員会が策定した。そこで定められた調査の目的は、「囚人労働の刑期にしたがって、流刑入植者による島の領土での植民が可能かどうか」<sup>45</sup>をさぐることにおかれた。遠征隊員には、イワン・ポリャコフ (И. С. Поляков) とアレクサンドル・ニコリスキー (А. М. Никольский) が選ばれた。

<sup>42</sup> *Брылкин А. «Письма г. Брылкина с Сахалина» // Записки сибирского отдела Императорского русского географического общества. 1864. кн. 7. исследования и материалы. С. 20.*

<sup>43</sup> Там же. С. 17-18.

<sup>44</sup> Там же. С. 36.

<sup>45</sup> *Семенов. История полувкковой деятельности... Ч. 2. С. 636.* 以下より再引用。 *Алексеев. Русские географические исследования... С. 69.*

1880年6月にサハリンに上陸したニコリスキーとポリャコフは、つぎのような印象を抱いた。「ここはロシアである。本物の生粋のロシアが日本の境界まで達しており、太平洋の向こうにはアメリカを眺めることができる」<sup>46</sup>。ふたりの調査は翌1881年6月まで1年間にわたってつづけられた。それによって、サハリンの自然が完全な姿で描き出された。自然地理分野のあらゆる側面についておこなわれた両者の調査は、とりわけ動物学的調査において傑出していた。ニコリスキーはその成果を学位論文として発表した。このモノグラフは、19世紀におけるサハリン地理調査の総決算といてよい<sup>47</sup>。そしてさきの調査課題に対してポリャコフは、つぎのように答えた。「サハリンを去るにあたってわたしは確信していた。サハリンである程度の農業をおこなうことは可能であるどころか、大いに国益にかなうことでさえある」<sup>48</sup>。

しかし、流刑囚による入植はいつこうに進まず、日露戦争によって南半分が日本に割譲された後、1906年にサハリン流刑は廃止された。日露戦争後という状況下で、地理学者はどのような行動をとったか。

1907年に開始されたロシア領北サハリンの地理調査を主導したのは商工省の地質学委員会(Геологический комитет)であった。本格的な調査は、1908年から2年間にわたっておこなわれた。調査隊は2隊に分かれた。ティホノヴィチ(Н. Н. Тихонович)が指揮した部隊は、シュミット半島を中心とした北端部分を、ポレヴォイ(П. И. Полевой)隊長の部隊は北東地域の油田地帯を中心に調査した。それまで、この地域はほとんど未知の知であった。しかし、「今や、ロシア領サハリンの全沿岸、および内陸部の大部分の正確な地形測量が存在する」<sup>49</sup>。地理学協会に提出された調査報告のなかでポレヴォイは、北サハリンの可能性をつぎのように総括している。まずポレヴォイは、全体としては失敗に終わった流刑植民にも一定程度の価値を認めている。すなわち、強制手段によらなければサハリンに入植者など存在しえなかったのであり、流刑囚の子弟という開発の新たな担い手を生み出した。それがなければ、「サハリンは、はした金で隣国に売り払われてしまっていたであろう」。「アムールのコルク」として、極東の安全保障においても重要な意義をもつサハリンは、石炭と石油の開発によって大きな利益をもたらさうる土地である。そのためには、彼が「サハリン港」と呼ぶところの商業港の建設が何より必要である。「サハリン港建設の最初のハンマーの一撃が、サハリンに新しい産業・文化生活の誕生を告げる時となる」<sup>50</sup>。

<sup>46</sup> *Никольский А. М.* Летние поездки натуралиста. СПб. 1900. С. 186.

<sup>47</sup> *Никольский А. М.* Остров Сахалин и его фауна позвоночных животных // Записки Императорской Академии наук. Т. LX. Приложение № 5. СПб. 1889.

<sup>48</sup> *Поляков И. С.* Путешествие на остров Сахалин в 1881-1882 гг. // Известия Императорского русского географического общества. Т. XIX. Вып. 1. Приложение № 2. С. 111.

<sup>49</sup> *Соколов Д. В.* Русский Сахалин. М. 1912. С. 13.

<sup>50</sup> *Полевой П. И.* Русский Сахалин. СПб. 1914. С. 46-47.

## おわりに：跨境する地政学

原暉之は、日露戦争後の極東を「現地総合調査の時代」であったと規定する<sup>51</sup>。ティホノヴィチとポレヴォイの北サハリン調査も、この「現地総合調査の時代」の一環として位置づけることができる。両者の調査とはほぼ時を同じくして、土地整理農業総局内の移民局の主導によるサハリン調査も計画された。しかし、隊長に指名されたパリチェフスキー (Н. А. Пальчевский) が 1909 年に死亡によって関心は薄れ、その後調査が再開されることはなかった<sup>52</sup>。首相ストルイピン (П. А. Столыпин) と土地整理農業総局長官クリヴォシェイン (А. В. Кривошеин) の主導のもとに組織された政府の「アムール現地総合調査」を中心に、この時代の極東帝国政策を検討した原による、ストルイピン政権期の東部辺境「拓殖」熱が第一次世界大戦の開始時点にはすでに遠い過去のものとなっていたという指摘は<sup>53</sup>、サハリンの側からも裏づけられよう。

日露戦争後のサハリンは、日露双方の地域認識が跨境する、トランスボーダーの地政学の文字通り檜舞台になった。そこで最後に、当時における日本の樺太調査を通して、南側からサハリン像を照らし出すことで、まとめに代えることとする。

1879 年 4 月、日本にも地理学協会が創立された。東京地学協会と名づけられたこの団体はイギリスの王立地理学協会を模範とした。初代社長 (会長) には北白川能久親王が就任した。皇室にパトロネイジされているという点は、イギリスだけでなく、ロシアを含めたヨーロッパの地理学協会に共通する特色である。また、学術団体というよりは、知識人のサロンであったという点においても、未知の地の探検・実見を重視するという姿勢においても、王立地理学協会にならった組織であったといわれる<sup>54</sup>。しかし、ロシア地理学協会の影響も見逃せない。創立主唱者には、1875 年の樺太千島交換条約締結時の全権榎本武揚と、当時のロシア代理公使花房義質の名がみられる。榎本は初代の副社長に就任した。ロシア在勤時、鉱物資源を中心にロシアの地理調査の業績に多数触れていた榎本が、ロシア地理学協会の活動に触発されて、日本にも同種の組織の必要性を唱えたことは想像に難くない<sup>55</sup>。1881 年にはロシア地理学協会の推挙を受けて、北白川が同協会の名誉会員に、榎本は正会員に名を連ねてもいる<sup>56</sup>。

1907 年、東京地学協会は樺太に調査隊を派遣した。当時の会長は榎本武揚であった。この調査隊の隊長をつとめた小林房太郎が編者となって、1908 年に『樺太地誌』がその成果として発表された。自然地理、歴史、人口・産業調査など、日露戦争直後の日本の樺太認識を通覧しうる同書には、「樺太境界劃定」と題された一篇が附録として収録されている。

<sup>51</sup> 原暉之「巨視の歴史と微視の歴史——『アムール現地総合調査叢書』(1911~1913 年)を手がかりとして——」『ロシア史研究』、No. 76、2005 年、50 ページ。

<sup>52</sup> Полевой. Русский Сахалин. С. 10.

<sup>53</sup> 原「巨視の歴史と微視の歴史」、63 ページ。

<sup>54</sup> 石田龍二郎『日本における近代地理学の成立』大明堂、1984 年、92 - 109 ページ。

<sup>55</sup> 加茂儀一『榎本武揚』中公文庫、1988 年、538 ページ；臼井隆一郎『榎本武揚から世界史が見える』PHP 新書、220 ページ。

<sup>56</sup> 石田龍二郎「東京地学協会編年史稿」『地学雑誌』、vol. 78、1969 年、88 ページ。

これは、樺太境界画定委員会の委員長をつとめた大島健一陸軍少将が、1908年5月に地学協会でおこなった講演を収録したものである。それによると、戦前のサハリンには3万5000人のロシア人が暮らしていたが、彼らは流刑囚として「元より強制的に自分の意思に反して寄越されたのでありますから、戦争の時に我軍に於て、其本国に帰りたいものは還して遣る方針を執りました為に、大概帰った」。したがって現在残っているロシア人は約4000人にすぎない。しかも彼らは「余程大打撃を受けて非常に今は壊れて居る状態であります」。「それに反して、日本に取った方は匪賊が居りませぬ」。割譲当時は数千人いたロシア人も、1年後には500人程度に減った。その大部分は、「我が政令の下に生活するのは、頗る安全であるから帰る必要は無いと云って、土著〔ママ。土着の誤りか——天野〕に決した者が三四百人ある様子であります」<sup>57</sup>。

大島を委員長とする国境画定委員会には、札幌農学校出身の志賀重昂が参加していた。1876年に創立され、1877年には日本初の「植民学」講座が設置された札幌農学校は日本の樺太研究における一大拠点を形成した。後の北海道帝国大学総長南鷹次郎は1906年に樺太調査に赴き、その成果を記した『農業視察復命書』（1905年）、『南樺太植民地選定調査書』（1906年）は、日本の樺太植民政策の基礎を築いた。また1906年から1908年にかけては宮部金吾と三宅勉が樺太の植物調査をおこない、その成果は『樺太植物概報』（1907年）、『樺太植物史』（1915年）にまとめられた。

志賀は、大著『大役小志』に「樺太の経営」という一節をのこしている。そのなかで志賀は、自然環境、水産資源、農産物などの共通性から樺太は「第二の北海道」とみるべき土地であり、「北海道の利益愈々薄らぐに随ひ、益々樺太に移り行くものにして、北海道餘力の漸減と共に、樺太の開発漸加するは、實にその順序なりとす」と論じ、長期的視野にたった「細く長い」経営方針が必要だと提言している<sup>58</sup>。

また志賀は、地質学委員会の北サハリン調査でティホノヴィチの側近をつとめたソコロフ(Д. В. Соколов)の情報に基づき、石油資源の重要性を指摘している<sup>59</sup>。そのソコロフは、日本の樺太経営をこのようにみていた。「日本人は島の自国領において実に精力的に活動している。その行動は驚くほど計画的かつ周到であり、道路の建設や通信手段の構築とともに植民を進めつつある。このすばらしい見本を見落としてはならない。……だからこそ、文化的にも経済的にも脆弱な移民でなく、日本人との競争に耐えうる精力的な入植者が必要である。そうでなければ、数年後には、入植と開墾が進み、移動手段も整備された日本領サハリンのとなりに、未開でみじめな、野獣のような人間がわずかばかり暮らすきびれた土地が残されることになるだろう」<sup>60</sup>。

<sup>57</sup> 小林房太郎編『樺太地誌』東京地学協会、1908年、217 - 220 ページ。

<sup>58</sup> 志賀重昂『大役小志』博文館、1909年、848 - 849 ページ。

<sup>59</sup> 同上、850 ページ。

<sup>60</sup> Соколов. Русский Сахалин. С. 148-149.